平成 28 年度　横浜市立宮谷小学校　学校だより 11 月号

みやがや

さきほこれ　宮谷　ひまわり

～フェアープレイ～

校長　奈良輪 孝雄

リオ・オリンピックでは、様々な感動をもらいました。その中でも、女子レスリングの吉田沙織選手へのインタビューが印象に残っています。4 連覇確実と言われ日本選手団の旗手を務めた吉田選手は、決勝戦でアメリカのヘレン・マルーリス選手に敗れ銀メダルとなりました。敗戦直後のインタビューで、「たくさんの方に応援していただいたのに、銀メダルに終わって申し訳ないです。」「取り返しのつかないことになってしまって…。」「最後は、自分の力が出し切れなくて…。」と号泣しながら答えました。それに対するインタビュアーのコメントが素晴らしかったのです。「そんなことないですよ。素晴らしい試合でした。」「そんなことはだれも思っていないと思います。日本中で拍手を送ってくれていると思います。」「素晴らしい銀メダルでした。ありがとうございました。」涙が出てきました。体が震えるほど感動しました。世界中の選手が吉田選手を倒すことを目標とし、押しつぶされるほどのプレッシャーの中で、想像を絶する練習を積み重ねてきた吉田選手に敬意と配慮がこもった温かさを感じました。シナリオのない試合・読み原稿のないインタビューであるからこそ、そこに人間性が表現され感動したのです。また、勝者であるマルーリス選手は、試合後「私は長い間、サオリと戦うことを夢見てきました。彼女は英雄です。彼女はこのスポーツで最も多くの栄冠を手に入れたレスラーで、彼女と試合できたことが本当に名誉なことだった。」とコメントをしたそうです。吉田選手に勝った選手が心技体に優れていたことに素直に嬉しく、心を動かされました。素晴らしい人間性です。吉田選手には「克己復礼」、マルーリス選手・インタビュアーには「他者への敬意」を感じました。共に真の勝者です。

さて、オリンピック・パラリンピック以上に感動したのが、「スポーツフェスタ 2016」です。私の心は、吉田選手やマルーリス選手のように「克己復礼」「他者への敬意」を持ち合わせた真の勝者に動かされます。宮谷小学校の児童のよさは、本番だけではなく、練習の時から真剣であることです。子どもの真剣さは見ていて美しさを感じます。かつて私が学級担任のとき、運動会の練習で気持ちが緩んでいる友達に向かって学級の子どもの一人が「だらだらやっていて、何が楽しいんだ。」と言っていたことが思い浮かびます。だらだら取り組むことは楽かもしれませんが、楽しくはありません。真剣にやった方が疲れも少なく、成就感を得られるのです。何もメダリストのように取り組む必要はありません。一人ひとりの能力に応じて真剣に取り組めばいいのです。吉田選手やマルーリス選手は、本番以上に厳しく練習等に取り組んできたことは間違いありません。その過程が見えるからこそ本番に感動するのです。スポーツフェスタは、赤組と白組に分かれ優勝をめざし勝負をします。しかし、勝利至上主義の考えに陥ると、敗者は己を振り返らず、他者（相手・審判など）へ責任転嫁しがちです。宮谷小学校の子どもたちは、決勝戦で負けた吉田選手と同様に、負けを潔く認め、マルーリス選手のように相手を賞賛しました。赤と白は、敵ではなく相手であり仲間なのです。宮谷小の子どもたちは、フェアープレイを体現してくれました。

この素晴らしい子どもたちのために、学校職員一同今後もよりよい教育活動をすすめていきます。保護者の皆様・地域の皆様のご協力に感謝すると共に、今後もますますお力添えをくださいますようお願い申し上げます。